

の先輩や同僚が何人も戦死・戦傷していました。私が若し中隊と行動していたら恐らく、戦死・傷の仲間入りをしていたことと思います。このように軍隊とは、部隊配属も、佐倉の営庭で他の列に並んでいたら？。初陣の作戦で？。湘桂作戦で？。退避壕の空襲で？更に、多数の戦友と共に第三中隊第一小隊に所属したら？。「軍隊は運隊だ」では片付けられない数奇な運命によって生死が別れてしまうものだ、と今でもつくづく感じています。

昭和二十一年六月、漸くにして鹿兒島に上陸復員することができたが、鹿兒島は戦災のため焼けただけでした。以来、もう四十余年、私は戦後、何か一つ心のささえとして書道を学び、書道を通じて人間性の開発をと思っています。軍人の時は軍人精神に徹するよう教育を受け、今その時培われた根性を以て、勤務のかたわら三十余年間、書道にかじりついています。書により修業、人柄の錬磨等師を通じ精進しています。

私は私なりに、自分の希望をとげ自己満足していますが、戦場で我々に代って犠牲となられた戦友の御遺

族のことを思い、毎年の慰霊祭に欠かさず参列させていただいています。この平和な今日あるのは、亡き戦友のお陰だと痛切に感じ、生ある限り永久に続けてまいりたいと決意を新たにしております。

## 通信兵の想い出

—湘桂に戦う—

神奈川県 浅井洋雄

思えば昭和十七年九月、新潟県村松東部第六十八部隊に召集、麦飯で激しい訓練を受け、キャシャな身体も結構体力を付けられた。十一月には千葉県佐倉東部第六十四部隊に転属、十八年一月元旦、南支黄埔に上陸したのである。我々は内地帰還の古参兵の交代要員だった。

独立歩兵第六十六大隊に転属、広東河南の第二中隊に配属され、二か月余の現地教育を受けた。後に、無線通信教育のため通信隊に入隊、ここでは初歩教育、

主にモールス信号、三号無線機の操作を受けた。これが作戦準備の教育だったのか、今度は軍通信隊に入隊、無線通信兵としての全般的な教育を受け、無事修業後帰隊したのである。その年の何月だったか、愈々大隊無線班編成のため、本部付き無線班員となったのである。

十八年十一月には、敵地に接する江門に進出、十九年初夏、いよいよ湘桂作戦が開始され、敵地に楔を打ち込むため三埠を攻略して、本格的作戦に参加した。

三埠出発のときは五号無線機だけを使用。広西省の梧州を占領した。その後、第四中隊に配属されたのだが、ある日の夜、私は疲れたためか寝込んでしまったことがある。たまたま本部との通信時間に自分が当番だったのか、誰が受信したのか不明だが、この受信が第四中隊の移動命令であった。

さあ大変だ、起こされて出発。そくそくと歩く。前方大明るくなった時

「ちよつとこい」

隊から少し離れた横道で、おとなしい藤田分隊長に一

発食わされた。久し振りのピンタだ。何も言われなかつたが、寝過ぎしの失敗だった。以後の大きな教訓になった。

昭和二十年五月三十日、湘桂撤退作戦の殿軍として、広西省柳江県大湾に部隊本部があり、私は古巣の第二中隊のある穿山墟の無線分隊員として配属されたのである。

板塘という所で付近の土民兵（広西省は広西モンロ―主義のため、同じ中国人でも、他省の者を極端に排斥、防衛するため強力な自衛組織を持っている）から奇襲を受け、たまたま地形不利のため激戦中との連絡があつた。

夕方、友野少尉以下〇〇名が救援に出発、この時兵員が少ないので通信兵の自分も狩り出され、銃を借りて加わつた。夜陰の強行軍である。一応戦闘は終つていた。少しづつ明るくなり、朝が来る。

戦死者が出ていた。誰だ、吉岡新三郎、大島敏雄、斎藤寅吉の三名だ。敵は既に撃退したが、早く帰隊だ。遺体を牛車に収容、自分は車の後を押しながら歩く、

牛車の軋む音、靴の音。

中隊長以下皆の心中は、何を考えているのか、ただ歩く。何キロぐらい来たろうか、熱くなって来た、だんだん死臭が強くなって来た。私はただ車を押す。

やっと帰隊、早速三遺体の腕を渋谷衛生兵が切断、火葬に付し、全員冥福を祈ったのである。

今でも思い出されるのは、戦死者が発発する前夜のことである。大島がそつと蚊帳を抜け出して、吉岡を伴い、私に「一杯やらないか」と誘いに来たのである。同年兵同志、勿論承知だ。大島は中隊長の当番だった関係か、うまく手に入れたのだろう、四合ぐらいの瓶を手にしてた。貴重な物だ。「何処でやろう、あそこがいい」。そこは裏門である。門の脇にテーブルと椅子が置いてあり戸のない土間である。もう一人渋谷衛生兵だったと思う、四人だった。

この夜は雲一つ無い晴天に大きな月が実に煌々と明るく冷たく光っていたのである。静かな夜である。戦友達も寝たろう、四人は静かに飲み交わし始めた。手許は灯が無くとも明るい。照らし出された顔を見なが

ら何を語り交わしたろう。勿論、今は全然記憶に無いが、誰が知ろう明日のことを、神がなさしめた死別の杯だったのか。月は見ている、やはり死別の光りだったのか。しかし、何故この四人が、このテーブルに、吉岡、大島は戦死、自分は遺体の車を押し、渋谷は二人の腕を切り茶毘に付した。後日、渋谷衛生兵は「二人は非常に勇敢だった」と語った。吉岡も大島も明るい人柄だった。

二十年七月、桂林を撤退し、大溶江口というところだったか、四百メートルぐらいの山の上で幾日か稜線に敵と対峙していた。無線分隊は樹の下で天幕を張っていた。敵の狙撃で頭上の木の葉がサラサラと落ちてくる。炊飯も煙を出せないため、三百メートルから山を下る。

米も無い、飯盒の蓋に米粒程の岩塩が一掴み、四人が困む、大きい小さいの二粒の岩塩が残っている。互いに顔色を氣遣っている。一人が箸を出した、小さいのが残ったそれに三人の眼が集中していた。特に分隊長の眼が光った、彼は承知している眼を上げない。

無言で食い終った彼は年配者だった。

戦闘に次ぐ戦闘、追尾する敵軍をかわしながら全県という所で終戦となった。それから部隊は復員のため集結地に北上した。

湖南省を八月下旬から幾日歩いたか、敗残の身を、これが大変だった。十月ついに揚子江の馬頭鎮にやつと着いた。南支出発から何千キロなのか、全員相当の疲れである。碌な物を食わず、よくここまで来たものだ。弱い者は途中でバタバタと死んだ。野戦病院も兵站病院もただ患者を一時収容し後送するだけだった。入院してかえって伝染病で死んだ者も無数であった。

## 白耶土湾敵前上陸と広東攻略

福島県 草野 亀 寿

歳月は流れ、早くも五十有余年前、昭和十三年九月半ば、予め覚悟はできていたものの、私にも赤紙が役場の吏員から手渡され、さて行かなくちゃと身震いを

感じた。

妻と何から先に話してよいかわからず、話しもそこに家族のものに留守を頼み、三日目に勇躍征途についた。時に二十三歳。

会津若松二十九連隊に入隊、隊の編成は、福島県下各地から召集された未教育の第一補充兵の人たち、これに班長が歩兵上等兵、分隊長は伍長、隊長は一年志願の少尉など全員三百有余人からなっていました。

九月二十七日、いよいよ屯営出発。沿線各駅の歡呼の声に送られ、日の丸の旗に包まれ、勝って来るぞという歌声は絶え間なく響き、一路大阪港へと汽車は進んだ。

二十九日、大阪港より船名は忘れましたが、一万トン級といわれる貨物船に乗り込み、夕方の波静かな瀬戸内海へ悠々と出帆しました。どこへ行くのやら絶対秘密。しかし、服装は軽く、これから寒さに向かうという時期に夏衣袴防暑帽に地下足袋携行。船内では多分、南支広東攻略ではないかとの噂が高まってきました。